

highlight

highlight(ハイライト)とは、演劇や映画などの見せ場、最も明るいところを意味する言葉。観客と劇場をつなぐコミュニケーションペーパーとして、「劇場」の可能性と京都・岡崎地域の文化芸術資源に光を当てていきます。

特集

2017年の劇場、現在進行形。 ～劇場って“メディア”なんですか？

いしいしんじ「劇場を食べる」

白井 晃インタビュー

影山裕樹、京都の文化会館を巡る

八角聡仁 教授による解説

あっ、いしいしんじさんが
パークプラザで執筆中ですよ。

連載

highlight MUSEUM / 堀井大輔

okazaki today / 柳沼昭徳

はじめてのカンゲキ / 川尾朋子、是住久美子

2017年の劇場、現在進行形。 ～劇場って“メディア”なんですか？

情報や人、人と人の間でコミュニケーションを促すものが“メディア”だとするなら、劇場もそうした装置のひとつになることはできるでしょうか。劇場が日々の生活に寄り添いつつ、対話を必要とする人たちに開かれた場でありたい。そんなことを考えていたら、作家・いしいしんじさんのことが思い出されました。ロームシアター京都のご近所にお住いのいしいしんじさんは、ときどき、劇場のパークプラザを原稿執筆の場所として使っている姿をお見かけします。たとえば、いしいさんは劇場にどんな想像を働かせますか？ ちいさな物語を創作いただきました。

劇場を食べる

作・いしいしんじ

少年は生まれて以来祖母の家で育った。母と父の顔はよくおぼえていなかった。あるとき夕ごはんの皿の上に劇場がのっていた。少年は祖母をふりかえったがなにもしない。出されたものは残さず食べる、そうでないといつ飢えるかわからない。皿の劇場をつまみあげ、大口をあけてポイとほうりこむ。その夜から芝居の夢をみるようになった。

目をとじてしばらくすると淡い照明が灯され、みたこともない衣装をつけた男女の影が音楽とともにあらわれる。なにをいっているのかわからないのは、これは外国語なのだ、と少年にもわかった。身ぶり手ぶりで、どんな話かはなんとなくわかる。少年は夢のなかでからだをひくひくと動かした。これが笑うということなのか、と思った。少年は笑った。シェイクスピアの「十二夜」だった。

ラシーヌ、ベケット、ウィリアムズ。図書館で題名を調べ脚本をノートに書きうつす。ときどき口ずさむ外国語のセリフを同級生は不気味がって近寄らなかった。一日の三分の一の時間を夢の劇場で過ごしている。この配分をもっとふやしたい、少年はおもった。ひたすらアルバイトにいそしみ、金をため、ニューヨークに渡った。

三年後、初めての役をつかんだ。舞台袖から覗くと、客席を埋めるひとびとはみな芝居や役者をすべて食ってやろうと待ち構えている。結構、少年はおもった。食われるとみせかけて食ってやる。やがて照明が落ち、少年はひらりと舞台にあらわれた。何千回と夢でみた幾多の影と、同じ身のこなしで。

いしいしんじ

1966年大阪生まれ。現在、京都在住。主な著作に『よはひ』（集英社）、『四とそれ以上の国』（文藝春秋）、『ある一日』（新潮文庫）など。ロームシアター京都では、「やわらかなぐら」という新たな神楽を創作して、昨年11月に上演。京都を中心とした日々の生活の様子は、web「いしいしんじのごはん日記」で掲載中（過去の記事は本にもなっています）。なお、ロームシアター京都で執筆をしている理由は「家に冷房も暖房もないから、ときどきね」とのこと。



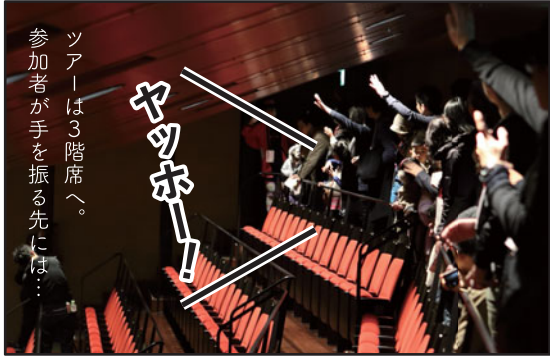
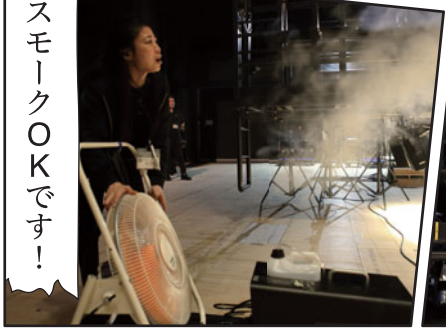
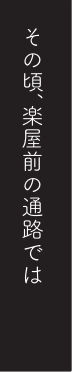
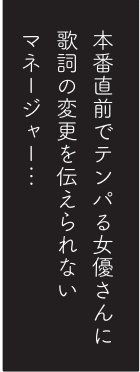
写真／石川奈都子

劇場ツアー

「BACK STAGE TRAVELING!」を誌上再現。

(バックステージトラベリング!)

1月29日、「ロームシアター京都1周年記念 プレイ！シアター」という企画の中で、舞台裏をのぞく演劇ツアーを開催しました。設定は、開演が迫る架空のミュージカル公演。その舞台裏では何が起きているのか。ツアーに参加する気持ちで体験してみてください。



写真／沖本明

Interview

「BACK STAGE TRAVELING」の構成・演出担当 ユリイカ百貨店・たみおさんに聞きました。



「劇場のリアルな舞台裏見学に、演劇要素を混ぜこんだ約1時間のツアー。実際の裏方スタッフもたくさん登場しました。」
「ロームシアターの裏方さんが普通にみなさんかつこよくて、ジェントルなんです。だから、そこはむやみに演出せず、いつもどおり段取りよく仕事されてる姿を見せることを心がけました」
「客席から見えないところで、いろんなプロフェッショナルが働いてるんですね。」
「そうなんです。舞台って俳優さんにフォーカスが当たりやすいけど、実は、スタッフの支える力があってこそ成り立っています。両方ともほんとに素敵な仕事だと思います」
「バックステージというのは、施設的なハード面だけでなく、やっぱり人の話なんです。」
「舞台裏の仕事は大変だと思うけれど、今回のツアーに参加した子どもたちが、この仕事に将来つきたいなって思ってもらえたらいいですね」
※「BACK STAGE TRAVELING」は、〈ロームシアター京都1周年記念 プレイ！シアター〉のひとつとして、1月29日に3回開催。たくさんの子どもたちも参加した。

文化会館が ローカルメディアの 新たな発信地に!?

ロームシアター京都×京都市文化会館の新プロジェクトが始まります

“メディア”としての劇場は、舞台と観客席の間だけにあるのでしょうか。ロームシアター京都が、物理的な場所として在るだけではなく、社会の中に“劇場流”の対話を生み出す装置になれないか。そんな対話のきっかけを作りたくて、劇場を飛び出し、劇場が地域と関わる新プロジェクト「CIRCULATION KYOTO(サーキュレーション キョウト)」を4月から開始します。

これは、山科区、伏見区、北区、西京区、右京区にそれぞれ位置する5つの京都市文化会館とロームシアター京都を円でつなぎ、そこから地域を眺めることで新たな“京都ローカル”の姿を探るもの。プロジェクト・ディレクターを務める編集者の影山裕樹さんが、開始に先駆けて文化会館の周辺を巡ってリサーチをするということで、そのレポートをお願いしました。

Field Research



写真／成田舞

洛西ニュータウン(西京区) F

高度経済成長期に造成された広大なニュータウンの中には、高島屋、その立体駐車場、銀行などが集積した、老若男女が憩うショッピングモールがある。京都市中心部から見れば坂が多いためか、女子高生のグループが揃って電動自転車に乗っている。ちょうど卒業式の予行練習の日だったようで、「私ら3月いっぱいまでJKやかからね」と笑いあっている様子に、青春の1ページを過ごす郊外の若者の日常を垣間見ることができた。

北大路バスターミナル(北区) E

京都に初めて来ると驚くのは、バスの多さである。本数も多いし、系統もたくさんある。みんな230円握りしめてバスに乗る、という話もよく聞く。そんな京都ならではのバスが集まる北大路バスターミナルで、「青のり場はどちらですか」と尋ねてきたおじいさん、教科書を開いてベンチに座る小学生、肩を小突き合う男子高校生たちに出会った。まさにここは、京都というまちを循環(CIRCULATION)し、様々な世代、目的の人々が慌ただしく行き交う人間交差点なのかもしれない。

伏見大手筋商店街(伏見区) A

伏見稲荷大社にも程近い大手筋商店街へ。京阪電鉄の伏見桃山駅の目の前で、人通りが多くとても賑わっている。商店街の中は、中心部に比べてどことなくチェーン店ばかりという印象を持ったけれど、暗い路地裏には飲食店と子供向けの塾が同居していて、ここにしかない人々の往来や人間模様を色々と想像してしまう。きっと、夜にここを歩けばディープな伏見を楽しめそうだ。

山科周辺(山科区) B

伏見区から山科区へ車で向かう途中、巨大な醍醐石田団地を通過する。山科には鴨川デルタのような、山科川デルタがあると聞いたので行ってみた。カップルが憩う姿を想像していたが誰もいない。どうやら山科デルタは別の場所にあるようだ。山を一つ越えているからか、山科の街並みは京都の中心部とは雰囲気違って見える。だけどそれが何かは未だに分からない。これから地元のキーパーソンを訪ね歩き、探っていくつもりだ。

大映通り商店街(右京区) C, D

嵐電が通る広隆寺の正門から一步脇に入ると、大映通り商店街がある。太秦エリアならではの、スーパーの前に大魔神の像が立っていたり、8ミリフィルムがディスプレイされたカフェなどが立ち並ぶ。なぜかゴミ袋に新聞紙を詰め込んで、雪だるまのような顔をしたオブジェがいたるところに置いてある。昼間にも関わらず、カラオケボックスで汗を流してきたマダムのグループが、「次はどこいこうか」と肩で風を切って歩いていた。

リアルな生活の風景から新しい情報の流れを生み出すこと。

井上章一氏はベストセラー『京都ざらい』(朝日新聞出版)の中で、中央のメディアが京都を必要以上におだてるから洛中の人々はつけあがるのだ、という趣旨のことを書いていた。なるほどと思ったけれど、他方で僕が好きな京都のまちは、東京のメディアが取り上げるものと少し違う。

東京で生まれて、自分が住むまちにそれなりに愛着を持って育ってきた。でも、子供の頃からまるでピラミッドかのように眺めていた中野サンプラザがなくなるというニュースに最近、ひどく落ち込んだ。結局、東京は地方から移り住む人や国内外の投資家のために日々塗り替えられていくまちなので、そこに昔から住んでいる人のささやかな思い出など歯牙にもかけられない。

京都のまちは、東京の人間からするととても魅力的に映るのは確かだ。でも、僕が好きなのは、観光客向けに開発された場所ではなく、そこに住む人のリアルな生活が見えてくる場所だ。よそ者の目があまり入らないからどこか隙があるというか、日々の暮らしに密着した、そこに住む人同士の非常にローカルな会話が繰り広げられるところ。言ってみれば肩肘の張らない、素の生活者のありのままの創造力が現れては消える、どこにでもある、しかしかけがえのない一つひとつの生の充溢した“場”そのものである。

親戚の取るに足らない動静、穴があくほどに見飽きたなんでもない風景。ただし、それぞれの人生を規定する、逃れられない場所。そこで起きる出来事や目の前に迫る山並みの美しさ、生活の機微を魅力的に発信し、まるで弧を描くように京都の中心部へ波及する情報の流れを生み出すことはできないだろうか。六本木ヒルズや渋谷のスクランブル交差点だけが東京ではないのと同じように、観光客でごった返す河原町や祇園、寺社仏閣だけではない京都のイメージを、そこに住む人々と一緒に考えてみたい。そう思うのは僕が浮かれた“観光客”だからだろうか。

文化会館という“場”が“メディア”になるには？

各館に回って話を聞いていく中で、いかに洛外と言えど、京都にはどこも歴史が重層的に折り重なっていて、当然、地域のコミュニティの結束が強いことを痛感した。そんな場所で、「地域の人と人をつなげる」なんて意味がない。そう釘をさされたこともあった。

しかし、僕はこのプロジェクトで、すでにあるコミュニティの結束力を高めることではなく、新しい移動や観光の動線を生み出し、これまで互に出会うことのなかったコミュニティをつなぐローカルメディアを考えてみたい。それは紙やウェブである必要はない。あらゆる意味で意外性のあるメディア、例えばマンションの回覧板、スマホアプリ、ゲストハウス、焼酎のボトルでさえあってもいい。

あるいは、「CIRCULATION KYOTO」で生み出されるメディアは、映画や演劇の脚本のような役割を持ってもいいかもしれない。もちろん、その演出家と俳優はここに住む人たちそのものだ。彼・彼女らは、花道を仰々しく歩む歌舞伎役者のように、ここで生まれたメディアを手で電動自転車、実家のハイエースで、京都という舞台を、肩で風を切って歩く。そんな風景、新しい人と情報の流れが生まれる瞬間に立ち会ってみたい。

ロームシアター京都×京都市文化会館5館連携事業
地域の課題を考えるプラットフォーム

「まちの見方を180度変えるローカルメディアづくり
～CIRCULATION KYOTO(サーキュレーション キョウト)～」

文化会館を拠点に、京都在住のさまざまな地元パートナーと講師陣、一般参加者が協働。ユニークな情報発信のメディアを生み出します。

開催時期：2017年4月～2018年3月

主催：公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団(ロームシアター京都、京都市東部文化会館、京都市呉竹文化センター、京都市西文化会館ウエスティ、京都市北文化会館、京都市右京ふれあい文化会館)／京都市
企画製作：ロームシアター京都

4月中旬より
参加者募集予定!



文／影山裕樹 Yuki Kageyama

1982年東京生まれ。早稲田大学第二文学部卒業後、出版社を経て独立。アート／カルチャー書のプロデュース、ウェブサイトや広報誌の編集、展覧会やイベントの企画・ディレクションなど幅広く活動している。昨年『ローカルメディアのつくりかた』(学芸出版社)を上梓。
<http://yukikageyama.com/>

時代と対峙する舞台、社会への足がかりとなる劇場。 まだその力を信じてやっていきたい。

白井 晃 (KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督) インタビュー

この5月に、ロームシアター京都との共同製作で、ヴェデキントの『春のめざめ』を演出する白井晃さん。白井さんが芸術監督をつとめるKAAT神奈川芸術劇場では、現代演劇から子供向けの創作劇、ミュージカルやダンス、伝統芸能まで、さまざまなジャンルの作品が上演されています。インターネットを始めとするさまざまな情報ツールの進化と浸透の中、白井さんは劇場をどんな「メディア」として捉え、どんな可能性をそこに見出しているのでしょうか。



白井 晃

Akira Shirai

1983-2002年「遊○機械/全自動シアター」主宰。演出家として独立後は、ストレートプレイ、音楽劇、ミュージカル、オペラまで幅広く手がける。第9回・10回読売演劇大賞優秀演出家賞受賞。2016年4月よりKAAT神奈川芸術劇場 芸術監督に就任。

縦の系譜をつくる、公共劇場の役割

ーストリンドベリの『夢の劇』、ブレヒトの『マハゴニー市の興亡』と、KAATで白井さんが手がける作品には、19世紀末から20世紀前半の作品が多いですね。また、どの作品も発表当時には物議を醸し、『マハゴニー市の興亡』に至っては上演禁止の措置を受けてもいます。こうした作品を取り上げる理由はなんでしょう。

白井 現代の社会、政治の状況と 戯曲が書かれた当時のそれが、相似形をなしているように僕には思えるんです。およそ100年前、重工業が発展し、車や電車、電話が登場したことで、人間の移動と通信のあり方は大きく変わりました。そして、この20年、私たちは、インターネットの普及による大きな情報革命にさらされてきました。電車に乗ってふと見ると、誰もがスマートフォンを見ているからね。そうした時代の変化の中で、人間のコミュニケーションはどう変わったのか。そしてなぜ今ふたたび、当時と似たような排他主義が世界的な潮流をなしているのか。そんな関心が、近代古典の中でも、特に事件性の強い作品を取り上げることにつながっているのだと思います。

ーこれまでの上演の手応えはいかがでしたか。

白井 『マハゴニー市の興亡』では、「恐ろしい。現代社会とまったく変わらない問題が描かれている」とおっしゃってくださる方もいましたが、残念ながら、今の日本ではブレヒトの時代ほどの問題提起にはならないという事実を再確認させられた気がします。ただ、僕なりにここから先に必要なものは何かということは考えられましたし、「100年前に、こんなふうには社会と対峙する演劇があった」ということを発信できただけでも意味はあったと思います。これは特に若い作り手に感じていることですが、同じ時代に生きる者どうしの競争、新たな表現への模索はあっても、世代間の縦の関係が日本の演劇界にはあまり見られない。ですから、若手の表現者にはもっともっと、過去の戯曲

や資料と出会って、過去との競争も意識するようになってほしいですし、そういう縦の系譜をつくる手助けも、公共劇場の大切な役割だと思います。

劇場と他のメディアの境界線

ーさきほど、この20年間のメディアの変化に触れられましたが、その時期はまさに、白井さんたちが、演劇をカルチャーとして世に知らしめる土台をつくり、テレビや映画など、劇場の外に進出していった時代でもあります。ご自身ではそうした環境の変化をどのように捉えていますか。

白井 観客を啓蒙するのではなく、自分たちに身近な感覚を使って、目の前にある社会の壁をどう乗り越えるか、世の中がこれからどこへ向かうのか、それを掴むための足場、アイデンティティを探そうというのが80年代の小劇場運動だったと思います。また、そういう表現に対する共感が観客を増やしたのは事実です。ただ、その共感がマスメディアと結びつくにつれ、劇場で行われることと、他のメディアで発信されることとの境界線は崩れていった気がします。今ではもう、よくも悪くも、劇場の観客とテレビの観客はなんら変わりありませんし、僕自身、そうした状況には矛盾を感じています。ただ、公共劇場に携わる立場から見れば、いわゆる主流の演劇や劇場のあり方に疑問を呈するアーティストはたくさん出てきていますから、彼らを招き、より多くの観客の視線に晒し、さらに成長してもらうことで、経済性だけでない表現をも掘り起こしていけるという気はしています。

ーとはいえ、今の時代に、テレビを消し、Wi-Fiを切断して、決まった時間、決まった場所まで足を運んでもらうのは、そう簡単なことではないですよね。

白井 そうですね。僕だって、外国のカンパニーの公演をYouTubeで観たりもしますから。でもやっぱり、その場に行かないと感じられない息づかいや音圧、

空気感はあるし、他の観客と一緒に座ることの高揚感や「観ている」自分を発見する面白さも、劇場ならではのものだと思います。だから、まずは「そこに行ってみない」と思わせる仕掛けを考えたいですね。「こんな考えはもう古臭いのかもしれない」って疑問も抱えつつ、それでもまだ、信じてやっていこうと思います。

『春のめざめ』から現代を捉え直す

ー5月に上演されるヴェデキントの『春のめざめ』は、少年少女の性の問題を契機に、大人の社会と子供との間で起こる摩擦を鮮烈に描いた、やはり近代劇の古典とされる作品です。

白井 ヴェデキントは、人間の動物性や残虐性、エゴイズムを掘り起こし、鮮やかに表に出してくる、非常に深い眼差しを持った作家です。『春のめざめ』では、子供たちの葛藤が、包み隠さず洗い出され、表現されますが、そのせりふが、17、8歳だったころの自分が親に投げかけていた言葉とあまりに近く、驚きました。この戯曲が書かれたのは100年以上前ですが、子供たちは時を選んで生まれてくるのではありません。どんな時代であっても、この世に生を受けた子供は、否応なく前の世代の空気をまとった親に出会い、学校、職場……と段階を経つつ、社会に適応していくわけです。ですから今、大人であるわれわれが、この作品に登場する子供たちに向き合ってみることは、自分たちが今どんなプレッシャーを子供に与えているのか、ひいては現代という時代がどういうものなのか、ということ捉え直す契機にもなるのではないかと期待しています。

インタビュー・文／鈴木理映子 写真／片岡陽太

Information

白井 晃 構成・演出『春のめざめ』
2017年5月27日(土)・28日(日)
ロームシアター京都 サウスホール
→公演情報・出演者の声はP8

八角教授による解説！

メディアについて考えるメディア

八角聡仁 Akihito Yasumi

(批評家／近畿大学教授、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員)



つねにスマートフォンやタブレットを持ち歩き、メールが来っていないか、新しいニュースがないかを折に触れチェックしている。仕事でパソコンに向かっていても絶えず新たな情報が割り込んできて、集中して「考える」よりもあれこれと「検索する」ことに時間を費やしてしまう――。身体を情報通信技術のうちに浸しきって、コンピュータ・ネットワークに囲い込まれた生活を私たちはすでに過ごしていないでしょうか。テクノロジーが発達しても人間の情報処理能力には限界があるので、グローバル資本主義はそうした「端末市民」の注意力、集中力を奪いあう競争を繰り広げています。そこでは「自律的に選択する主体」に代わって、ネットにアクセスするたびにサーバーに保存されていくログの蓄積が「個人」を形成するわけです。「メディア」をめぐる問題には多様な側面がありますが(あるいはメディアという概念の不透明さそれ自体がメディアの根本的問題なのですが)、ここでは「中間にあって媒介するもの」というメディア／メディウムの原義をふまえつつ、あらゆる思考と行動がデジタル・テクノロジーによって媒介される情報産業社会における「劇場」について考えてみましょう。

歴史的に見れば、かつて「劇場」は例えば「書物」とともに、同時代のテクノロジーに支えられて人間の日常生活や知のあり方に大きな影響力を持ったメディアでした。しか

し、デジタル技術の速度に慣れた者にとって、いまや劇場というメディアは情報伝達に関してあまりに鈍重であり、人々に稀少な知識をもたらすものでもなく、書物のような遍在性も持っていません。

メディアのデジタル化とは、個々のテクノロジーがすべてコンピュータとなり、あらゆる情報が0と1の記号列に置き換えられることを意味します。メディアとしての劇場もコンピュータ化される領域が増えていくことは間違いないでしょう。デジタル化された書物はその遍在性をさらに拡張し、他のメディアとの接続を広げていますが、その一方で私たちは、本を読むという経験が、紙という物質の空間的編成とともに思考し、記憶し、想像する営みであったことに改めて気づかされています。電子書籍の利便性を活かしつつ、それを紙の本の文化と結合させた新しい「読書」の体験を創出することが喫緊の課題だとすれば、それは劇場においても同様です。美術の世界ではすでに「ポスト・メディウム」をめぐる議論がさかんですが、もとより舞台芸術は単一のメディウムには還元できない多様な記号作用の複合体(まさに複数形としてのメディア)であり、今日のメディア環境を省察するための公共メディアとして潜在的な力を秘めているはずで

百年の夢が交差する場所

ー琵琶湖疏水周辺ー

写真と文／柳沼昭徳（劇作家・演出家）

京都の嵯峨で生まれ育った私だが、街の反対側に位置する岡崎は幼い頃から馴染みの深い場所だ。小学生の頃で言えば、夏休みにはスイミングスクールの踏水会に通ったし、日曜には弟と近くに暮らす従兄弟と共に京都市動物園によく通った。高校の頃なら浴衣姿の彼女と祇園祭の喧騒を嫌って、勸業館前の冷たい敷石に座って涼をとった。あと後年には木屋町で深酒をして、あぐく記憶をなくしたまま朝、京都市美術館裏の池の畔で目覚めたこともあった。

特に思い出すのは中学の頃。夏休みの社会の自由研究で、琵琶湖疏水を扱った。1989年。竣工100周年を前に、新聞記事にイベントに、研究資料はあふれていた。特に、動物園横の当時できたばかりの琵琶湖疏水記念館には夏休みの間、幾度となく足を運んだ。

記念館の屋外に出ると、疏水分水路のトンネルがある。流れ出る水の流れをながめ、音を聞く。レンガ造りのトンネルには当時の知事・北垣国道の遺した落款「楽百年之夢（百年の夢を樂しむ）」が掲げられている。

やがて記念館を離れて、南禅寺水路閣の脇を登り、水路沿いに蹴上の船溜まりまで歩き、疏水の設計者・田辺朔郎の銅像が立つ場所までやってくる。眼下には平安神宮の大鳥居や京都市美術館を始めとする岡崎エリアとその向こうの京都の町並みが広がっている。

そのほとんどが人力で掘られた疏水によって、発電所ができ市電が走る。運河ができ船が往来し、浄水場

ができ水道が通る。人の生活は変わり、流通が変わり、産業が変わり、文化は変わる。なんと壮大な夢だろう。今につながる京都の近代化、文字通りその源流には琵琶湖疏水がある。明治23年の竣工式では4月にも関わらず、祇園祭の鉦が並び、大文字にも火が灯ったというから市民の喜びは相当なものだったのだろう。

そしてまた歩く。インクラインの脇を下っていくと、田辺博士が私費で建立した17名の殉職者を祀る碑が立っている。「一身殉事萬戸雷恩（一人の死が万の家庭に潤いをもたらした）」巨石にはそうある。

観光客の賑わい、動物園の子どものたちの声、抱かれた百年の夢と殉じた者、人びとの歓喜、市電の音、水力発電機の音……水の流れる音を聞きながら、過去と現在を越えて、人と街の営みを近くに感じることで、私にとって、岡崎はそんな場所だ。



柳沼昭徳 Akinori Yaginuma

1976年京都生まれ。1999年 に劇団「烏丸ストロークロック」を旗揚げ、代表。社会の抱える不全とそれが及ぼす人々への影響を描く。近年は各地で演劇ワークショップや市民参加型の創作も多く手がけている。2018年2月には、ロームシアター京都セレクションとしてノースホールにて新作を上演予定。第60回岸田國士戯曲賞ノミネート。2016年度京都市芸術新人賞受賞。

REPORT

2本の感想が届きました！

はじめてのカンゲキ04

書道家の川尾朋子さんが『寒川晶子ピアノコンサート』を鑑賞。「ド音」だけのピアノで話題のコンサートでしたが、実は“墨”というつながりがあったみたいですよ。



©田口まさ

01

ロームシアター京都セレクション
『寒川晶子ピアノコンサート
～未知ににじむド音の色音～』

知人二人からオススメのメールが届いたこともあって、これは行かねばと向かった疑問だらけのコンサート。舞台には、88の鍵盤を「ド」から「ド#」の間で細かく調律した繊細なピアノと、すらりと伸びた腕が美しい寒川晶子さんがいらした。

驚いたのが、ド音だけのピアノは、小学校の習字の授業で墨のにじみを見た時の感覚から発想したものであったこと。墨のにじみは、文房四宝(筆墨硯紙)の組み合わせと、水の量、そしてその日の温度、湿度、書く人の筆圧、筆速、などさまざまな要因から、その時だけのにじみが出来上がる。そんな墨のモノクロームのグラデーションを「ド音」だけで表現してみようとした寒川さんの発想そのものに感嘆してしまった。

ド音だけのピアノの演奏を聴き、1音1音の違いを聴き取るのは至難の業。素人の私には不可能なのだが、それでも心の耳をもすまして聴いてみるというとても貴重な体験になった。実際には不可能でも、その行為自体が普段使われていない能力を呼び起こしてくれるようだった。微妙な気持ちの揺れや体内の水分量の変化までも捉えるように、一つの細分化された音を観客が心静かに全身全霊で聴く、不思議な空間にいた。

知人が私にオススメした理由が、このコンサートにたくさん隠れていたように思う。その答えを見つけるために来たようだった。まだまだ見つけられなかったのも、もう一度聴きに行かなければと思っている。

ロームシアター京都オープニング事業
ロームシアター京都セレクション『寒川晶子ピアノコンサート～未知ににじむド音の色音～』
2016.9.24(土) サウスホール
出演：寒川晶子(ド音ピアノ)、檜垣智也(アコースモニウム)、伊藤悟(音の織機)
曲目：「音に溶けて」Vol.1(浮浮)、Vol.2(震弦)、「にじませ震わせ」「響紡ぎ織」



感想を書いたひと：

川尾朋子 Tomoko Kawao

書道家。NHK大河ドラマ『八重の桜』OP映像、NHK Eテレ『趣味どきっ!』講師、TEDでのパフォーマンスなど、あらゆる媒体での文字や墨表現が好評。四国大学特任教授。京都在住。



©井上嘉和

02

ミュージカル
『わたしは真悟』

私はロームシアター京都と同じ岡崎地域に建つ京都府立図書館で司書として働いています。すぐ近くで勤務しているにもかかわらず、実は、ロームシアター京都での観劇は、12月に上演されたミュージカル『わたしは真悟』が初めてでした。図書館ではミュージカルと連動して読書会やおすすめ本紹介などの取組を行ってききましたので、模図かずおの原作がミュージカルとしてどう表現されるのか大いに興味がありました。

新しい劇場に足を踏み入れ、席から舞台を見下ろしたとき、今からどんな世界が繰り広げられるのかと、客席にいる知らない人たちとワクワク感を共有している感覚を味わいながら幕が上がるのを待ちました。産業用ロボットの真悟がどう表現されるのか、表現するのは難しいだろう、原作とかけ離れたものになっているのではないかと勝手に想像していましたが、原作の世界観を表現する演出方法に大変驚きました。俳優だけでなく、音楽や舞台装置など全てがミュージカルを構成しているのだと、当たり前ではあるのですが、ライブで演じられる作品の中に身を置くと改めて体感しました。

幕が下りて劇場から出たとき、いつもの風景、いつもの日常に戻ってきてしまった、さっきの世界はいったい何だったのだろう、こういう時、同じ作品を観劇した人と話ができるといいなと思いました。カフェでもいいのですが、図書館でもそんな感想を言い合えるような空間ができないかな、そんなことを考えています。

ロームシアター京都オープニング事業 ミュージカル『わたしは真悟』
2016.12.23(金・祝)ー25(日) メインホール
脚本：谷 賢一 音楽：トクマルシューゴ、阿部海太郎 歌詞：青葉市子
演出・振付：フィリップ・ドックフレ
出演：高畑充希、門脇 麦、小関裕太、大原櫻子、成河 他

感想を書いたひと：

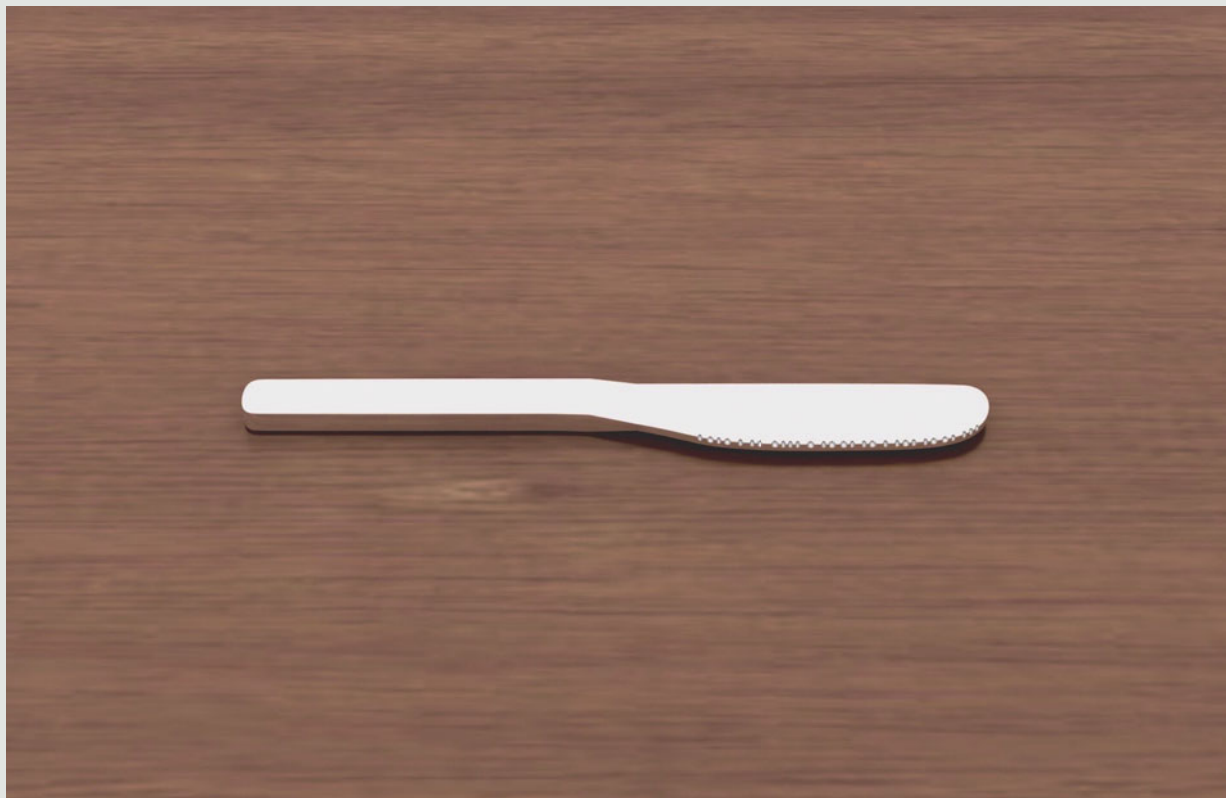
是住久美子 Kumiko Korezumi

京都府立図書館職員。図書館を人と情報をつなぐだけでなく、人と人をつなぎ、新たなものを生み出す場所にしようと挑戦中。



highlight MUSEUM

大学の先生が推薦者となって、いま京都から生まれている才能に光を当てます。
今回は、安河内宏法先生のご推薦、京都工芸繊維大学大学院の堀井大輔さんをご紹介します。
一見、何気ないバターナイフのプロダクトに見えますが…。



「バターナイフ」2016年、アルミ



堀井大輔 Daisuke Horii

1991年大阪府出身。今年の春、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科デザイン学専攻を卒業予定。製品デザインを学ぶ傍ら、写真に惹かれ、豊かな表情のサーフェスを持つプロダクトを目指すようになる。

Comment：

このバターナイフは、モノがインターネットにつながると言われる時代に、効率化の意味をもう一度考え、その上を軽く飛び越えていきたいと思い、制作しました。これから社会の中で仕事をしていくことになりましたが、向き合っている状況に、素直に反応し、カウンターを当てにいく気持ちを持ち続けること。サーフェスや仕上げの美しさに対して好奇心を持ち続けること。このふたつを自分の主題として、楽しみたいと思います。

推薦者のことば：

何気ないバターナイフでバターを削るとバーコード状の線が入って、その線をバーコードリーダーで読むとハムを買うことができるwebページに繋がる。こんな堀井くんのデザインは、実用性があるといえはあるし、資本主義化での僕たちの日常生活に対する批評性もある。個人的にはバターの断面という普段は気にもかけない些細な対象を、人知れず別の大きな世界へ繋げようとする発想が良いなと思う。ロマンティック。

安河内宏法（京都工芸繊維大学美術工芸資料館特任助教）

ロームシアター京都 2017年度の自主事業が始まります！

2016年1月にオープンしたロームシアター京都。京都に「劇場文化をつくる」ことを目指し、劇場のレギュラーシーズンがいよいよスタートします。

劇場とは一体どんな場であるべきなのか？ スタートにあたり改めてみずからに問いかけました。優れた作品や好きなアーティストと出会い、心動かされる機会を生み出すことも大切でしょう。しかし可能性はさらに開かれているはずだと考えます。さまざまな人々が行き交い、出会いを生む“場”が持つ潜在的な力を引き出すために何ができるのか。皆さんの中に既にある期待をさらに上回るためにも、私たちは一見回り道にも思えるよう

ロームシアター京都 プログラム・ディレクター 橋本裕介

PICK UP

白井 晃 構成・演出『春のめざめ』

性の葛藤、社会の抑圧…。センセーショナルな名作戯曲に注目の若手俳優が挑む。

2017年 5月27日(土) 13:00／18:00 開演★
28日(日) 13:00 開演

★ポスト・パフォーマンストークあり。出演：白井 晃、志尊 淳、大野いと、栗原 類（予定）

原作：フランク・ヴェデキント 翻訳：酒寄進一 音楽：降谷建志
構成・演出：白井 晃
出演：志尊 淳 大野いと 栗原 類
小川ゲン 中別府葵 北浦 愛 安藤輪子 古木将也 吉田健悟 長友郁真 山根大弥
あめくみちこ 河内大和 那須佐代子 大鷹明良

1891年の出版後、そのセンセーショナルな内容から15年にわたって上演禁止となった戯曲で描かれるのは、少年少女の生／性へのめざめと葛藤、そして、彼らと関係する大人やその背後にある社会の抑圧、無理解、断絶…。ベルリン・ドイツ座での初演以来、オペラ、映画、ミュージカルと多彩な形式で上演され、世界中のアーティスト、観客を魅了し続けてきた本作が、瑞々しいキャストと白井晃の手により原作版ストレートプレイとして蘇ります。

チケット S席 5,500円 A席 4,500円 B席 3,500円(全席指定・税込)
ユース(25歳以下)は各席種 1,000円引き(限定枚数・要証明書) ※未就学児童入場不可
会場 サウスホール
お問合せ ロームシアター京都チケットカウンター TEL：075-746-3201

[主催]ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)／京都市
[企画製作]KAAT 神奈川芸術劇場 [共同製作]ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)

VOICE



志尊 淳

この作品で描かれている思春期の葛藤は、誰しもの通る道であり、同世代に共通する感情や、親世代にとって性はどう対応するかなど、人それぞれ、環境によっても感じ方は違うと思います。僕自身久しぶりの舞台なので、プライドは捨て、白井さんの胸に飛び込むような気持ちで挑戦したいです。

大野いと

前回の白井さんの演出作品『マハゴニー市の興亡』を観せていただきましたが、演出にユーモアがあり、お会いした白井さん自身はとても魅力的でした。志尊さんも栗原さんも、役にピッタリの方だと思うので素敵な舞台になると思います。頑張ります！

栗原 類

2014年に『春のめざめ』の朗読劇をやらせていただいたことがあります。僕が演じるモーリッツ役は、思春期・成長期にぶつかる普通の男の子。子供らしい仕草や表情など、過去の自分を振り返りつつ、動きを作っていきたいです。

アルディッティ弦楽四重奏団 × 白井 剛

現代音楽の匠とコンテンポラリーダンスの出会い。伝説の舞台空間が再び！

2017年 6月23日(金) 19:00 開演

出演：アルディッティ弦楽四重奏団(演奏)、白井 剛(ダンス)
曲目：【第1部】アルディッティ弦楽四重奏団
クルターク「ミハーイ・アンドラーシュへのオマージュ～弦楽四重奏のための12のミクロリユード」、細川俊夫「沈黙の花」、リゲティ「弦楽四重奏曲第2番」
【第2部】ダンスとの共演
クセナキス「ST4」、「Ikhoor for trio」、「Tetras」

アルディッティ弦楽四重奏団による現代作品への深い解釈と卓抜した演奏は、世界各地に広く知られ、高い評価を確立しています。第2部では、これまでも共演を重ねて、好評を博してきたダンサー・振付家の白井剛とのコラボレーション。ダンスとの共演は、今回の来日ツアー中、京都だけの特別プログラムです。

チケット 一般：4,000円 ユース(25歳以下)：3,000円
お問合せ ロームシアター京都チケットカウンター TEL：075-746-3201

[主催]ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)／京都市
[協力]城崎国際アートセンター(豊岡市)

VOICE



アーヴィン・アルディッティ

アルディッティ弦楽四重奏団としては、初めての京都になります。演奏プログラムは、どれも私たちと密接な関わりを持った作曲家のものですが、なかでも細川俊夫の「沈黙の花」は、日本の伝統に深いつながりを感じていただけるはずです。すばらしいダンサー、白井剛との共演は、アルディッティにとって「古典」ともいえるギリシャの作曲家クセナキスの3作品。白井が力強いリズムを刻むクセナキスの音楽にどう身を委ねるのか、私たちもとても楽しみです。

白井 剛

「運動する音の構造物」というのがクセナキスの音楽に対する印象です。混沌としているようでいて整然としているようでもある。絶え間なく動いているけれど完全に静止した世界のようにもある。ミクロなのかマクロなのか、永遠に静止した宇宙の中を運動するエネルギーの粒、渦。その軌跡に身を委ねてみる。猛スピードで置いていかれる。容易く人を寄せ付けない超高熱量と冷たい硬度。鉱物的にホットでクール。京都での公演に向けて、クセナキス宇宙の水際でバシャバシャやっています。

東アジア文化都市 2017 京都

テーマ「東アジアが鼓動する」京都市、長沙市(中国)、大邱広域市(韓国)

2017年 2月～11月 芸術祭「アジア回廊」(8～11月)、日中韓文化ウィーク(9月)ほか

会場 ロームシアター京都、京都芸術センター、二条城など京都市内各所
[主催]東アジア文化都市2017京都実行委員会、京都市、文化庁



日本・中国・韓国の3カ国から選定された都市が1年間にわたり交流する「東アジア文化都市」が今年は京都へ。期間中、開催都市との交流や伝統文化から現代美術まで多彩な文化イベントが市内で開催されます。ロームシアター京都では2月の開幕式典に続き、11月19日(日)にクロージング事業が開催予定です。

ロームシアター京都とは

2016年1月10日、50余年にわたり親しまれた京都会館がリニューアルオープン。京都市に本社を置くローム株式会社と京都市が50年間の命名権契約を結び、「ロームシアター京都」という新しい名を得て、京都における文化芸術の創造・発信拠点として人々の暮らしと芸術がつながる新しい「劇場文化」をつくり出す。

お問合せ ロームシアター京都

〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13
TEL 075-771-6051(代表)
FAX 075-746-3366
http://rohmtheatrekkyoto.jp/

highlight vol.5

編集ディレクション：竹内厚
アートディレクション・デザイン：山田正江
編集：ロームシアター京都(橋本裕介、武田知也)
発行：ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)
発行日：2017年3月29日(水) 禁・無断転載